

人間社会学域 国際学類 ヨーロッパ圏研究プログラム

【授与する学位】 学士（国際学）

| 大学（大学院）の目的  |
|---|
| 金沢大学は、教育、研究及び社会貢献に対する国民の要請にこたえるため、総合大学として教育研究活動等を行い、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする。 |

| 学類（研究科）の教育研究上の目的  |
|---|
| 人間社会学域は、人間及び人間社会に関する普遍的真理の探求とともに、激変する複雑な社会状況の下で、人間及び人間社会が直面する諸問題の解決に貢献寄与するための教育を行い、社会に貢献しうる自発的な課題探求能力や解決能力を持ち、かつ多文化共生時代にふさわしい理解力と判断力を持った個性的な人材を養成することを目的とする。<br>国際学類は、国際社会と日本社会に関する基礎知識を修得し、諸地域の実態を踏まえた国際関係のマクロ的理解及び個々の地域に関する実践的知識を修得する専門教育を展開する。仕事で使える英語と日本語教育のための日本語を含む各地域の言語の高いレベルでの修得を目指す教育を行い、21世紀のグローバル化が進んだ社会の本質を理解し、異文化を持つ他者とのしなやかな共生を可能とする人材を養成することを目的とする。 |

| ディプロマ・ポリシー（DP）   | カリキュラム・ポリシー（CP）  | アドミッション・ポリシー（AP）   |
|--|--|--|
| <b>【卒業認定・学位授与に関する基本的考え方（前文）】</b><br>本学国際学類ヨーロッパ圏研究プログラムは、ヨーロッパとその関連諸地域に対する言語コミュニケーション能力に裏打ちされた実践的知識を基礎に、価値の多様性に基づく文化的寛容を模索する現代ヨーロッパ社会の理念に学ぶ、真の国際人を育成することを社会から期待されている。<br>そうした人材を育成するために、本学類ヨーロッパ圏研究プログラムでは、所定の課程を修め、必要な単位を修得し、かつ研究指導を受けた上で、卒業論文の審査及び試験に合格し、次のような目標を達成した者に、学士(国際学)の学位を授与する。   | <b>【教育課程編成に関する基本的考え方】</b><br>本学類ヨーロッパ圏研究プログラムでは、ディプロマ・ポリシーに掲げる目標を達成するために、全学共通科目、専門教育科目を体系的に編成し、講義、演習、実験、実習を適切に組み合わせた授業科目を開講する。具体的には、教育課程については、カリキュラム・ツリーやナンバリングを用いてその体系性や構造を明示する。  | <b>【入学者受入れに関する基本的考え方（前文）】</b><br>国際学類は、実践的な英語などの語学力を活用して、将来、外務・対外援助機関や国際機関で働きたい人、海外のNPO・NGOで経験を積みたい人、多国籍企業で力を試したい人、外国人に日本語・日本事情を教えたい人、国内での国際交流活動に携わりたい人などに必要な、多民族・多宗教・多文化共生社会を生き抜く強靱な知性と深い共感性、国際的な場におけるコミュニケーションに必要な外国語運用能力、具体的な問題提起と解決立案を行うセンスを養うことを教育目標とします。<br>国際学類には国際関係・国際協力系、地域研究系、インクルーシブ社会構築系という3つの系に大別される複数のプログラムがあり、そのうちのいくつかは英語のみで卒業できます。   |
| <b>【学生が身に付けるべき資質・能力】</b><br>(1) 現代ヨーロッパの政治・経済・文化についての基礎的知識を修得し、将来この分野の専門職業人として活動することができる能力。<br>(2) 歴史と伝統の深い根を有すると同時に、現代に生きる創造力ある世界でもあるヨーロッパ社会が産み出してきた思想、文学、芸術等の歴史的諸価値に対し、それを理解することができる豊かな感受性という資質。<br>(3) ヨーロッパのみならずその関連諸地域の社会・文化の理解のもと、複眼的に世界を見ることができる能力。<br>(4) 外国語で書かれた文献を正確に読解し、確実な情報基盤を築くことができる能力。<br>(5) 自らの論理的な思考を、正確かつ高度な外国語を使って表現できる能力。 | <b>【教育内容・教育方法（教育課程実施）に関する基本的考え方】</b><br>1. 教育内容<br>(1) ヨーロッパ世界とその関連諸地域の諸事象について、人文科学や社会科学の様々な研究方法を通じ認識を深めることに主眼を置く。<br>(2) 上記認識の深化に併せて、英語のみならず欧州諸言語の実践的運用能力を伸ばすことを通じて、たとえば、環境、人権、福祉、観光といった諸分野で新しい試みに挑みつつけているヨーロッパの現在を、複眼的に把握する能力を修得することができるように授業科目を構成する<br>2. 教育方法<br>(1) 学びの中心に少人数でおこなう演習を置き、課題探求型の自己学修を指導する。<br>(2) 現在の国際社会に必要な外国語の運用能力を培うための専門科目（E科目*や言語コミュニケーション科目）を充実させるとともに、異なる価値観に接することを奨励し、留学や異文化体験などを単位認定する。<br>*E科目：英語で開講する専門教育科目 | <b>【求める人材】</b><br>・多文化や多民族、及び国際社会における諸問題に積極的な興味を持つ人<br>・自国文化のアイデンティティを常に問い続ける、探究心あふれる人<br>・英語をはじめとする国際的に重要な外国語の実践的な運用能力を高めるために、努力を惜しまない人<br>・探究心とコミュニケーション能力を用いて、諸問題を粘り強く話し合い、国際的な場で相互理解と交渉妥結に達しようとする人<br>・将来、国際的な場での活動への従事を目指す人   |
|  | <b>【学修成果の評価】</b><br>(1) 授業科目に対して成績評価の基準及び方法を明示し、それに基づいて、学修成果を評価する。<br>(2) 学士課程での学修成果は、「卒業論文」を含めた修得単位数によって行う。<br>(3) 卒業論文の審査は、論文審査及び口述試験により実施する。  | <b>【選抜の基本方針】</b><br>■一般選抜<br>基礎学力に加え、国語・英語の学力と数学の学力又は総合的な課題（総合問題）の理解力・論理的思考力・表現力等を重視します。なお、大学入学共通テストの「英語」については、4技能をみる所定の英語外部試験のスコアを提出することができます。<br>■KUGS特別入試（総合型選抜）<br>第1次選考では、4技能をみる所定の英語外部試験のスコア及び調査書、志願理由書、活動報告書、高大接続プログラム提出課題等の書類を総合的に審査します。第2次選考では口述試験を行います。口述試験では、論理的な思考や国際コミュニケーション能力、国際問題への関心などを中心に総合的に判定します。なお、調査書、志願理由書、活動報告書、高大接続プログラム提出課題等も口述試験の際の参考とします。<br>■超然特別入試（A-lympiad選抜、超然文学選抜）<br>出願資格及び出願要件を満たした上で、自主的に課題を発見し解決する意欲を有し、国際交流に必要な表現力と英語を中心とした外国語コミュニケーション能力を修得して世界に向けて活躍する熱意を有する人を求めます。<br>口述試験（プレゼンテーションを含む）では、論理的な思考や国際コミュニケーション能力、国際問題への関心などを中心に総合的に判定します。なお、調査書、志願理由書、活動報告書等も口述試験（プレゼンテーションを含む）の際の参考とします。<br>■帰国生徒選抜<br>第1次選考では、4技能をみる所定の英語外部試験のスコア及び成績証明書（調査書）、推薦書、志願理由書の書類を総合的に審査します。最終選考では口述試験を行います。口述試験では、論理的な思考や国際コミュニケーション能力、国際問題への関心などを中心に総合的に判定します。なお、調査書、推薦書、志願理由書も口述試験の際の参考とします。<br>■国際バカロレア入試<br>出願資格を満たした上で、自主的に課題を発見し解決する意欲を有し、国際交流に必要な表現力と英語を中心とした外国語コミュニケーション能力を修得して世界に向けて活躍する熱意を有する人を求めます。<br>口述試験では、論理的な思考や国際コミュニケーション能力、国際問題への関心などを総合的に判定します。なお、志願理由書も口述試験の際の参考とします。<br>■私費外国人留学生入試<br>パターンAでは英語及び日本語の文章を読ませ、それに関する問いに日本語で答えさせます。これによって、英語の知識とともに、社会・文化についての知識や論理的思考力及び日本語能力を総合的に評価します。また、口述試験では、基礎知識や日本語によるコミュニケーション能力、勉学意欲を十分に有しているかを判断し、日本留学試験の成績や所定の英語外部試験のスコアと合わせて、総合的に判定します。パターンBでは英語による文章を読ませ、それに関する問いに英語で答えさせます。これによって、社会・文化についての知識や論理的思考力及び英語能力を総合的に評価します。また、口述試験では、基礎知識や英語によるコミュニケーション能力、勉学意欲を十分に有しているかを判断し、日本留学試験の成績や所定の英語外部試験のスコアと合わせて、総合的に判断します。 |
|  |  | <b>【入学までに身に付けて欲しい教科・科目等】</b><br>国際学類では、グローバル化する世界を多様な観点から理解し、異文化との〈しなやかな共生〉を実現することのできる真の国際人を送り出すことを目指しています。この目的の実現のために、本学入学前に「英語」や「政治・経済」、「世界史」、「地理」などの学習に積極的に取り組み、これらの教科の知識を十分に獲得しておくことを望みます。また真の国際人として活躍するためには、自国の歴史・文化についての教養も不可欠です。そこで志願者には、日本理解の基礎として「日本語」（国語）及び「日本史」の学習を強く推奨します。「日本語」での読み・書き・話すことへの能力は、大学で高度な知的訓練を受けるにあたり絶対必要な条件です。  |